



文責 本宮小校長 佐久間仁

## 県 P T A 研究大会



福島県 P T A 研究大会会津若松大会に田中一行 P T A 会長さんとともに参加してきました。大会主題「ともに学び、ともに創る『温故創しん』 P T A」のもと、大会宣言案、決議案が全会一致で承認されました。全体会に続き、記念講演、分科会が行われました。講師の先生から興味深いお話をお聞きすることができ、有意義な研修の機会となりました。



### 〔記念講演〕

◇演題 日本人は月や星をどう愛でてきたのか『星空浴の薦め』

講師 渡部潤一氏（天文学者）

・昨年の天体ショーでアトラス彗星（帚星）が話題になった。日本では、古来から、彗星は「凶兆」（飢

饉など不吉なことが起きる前触れ）と考えられていた。ヨーロッパでは、対照的に彗星は「瑞兆」（豊作などよいことがおきる前触れ）と考えられていた。

・メソポタミアやエジプトなど古代文明では、星を方位や季節を知る手がかりにしていた。一方、日本は、国土が起伏に富み、季節感もあるため、星に頼る必要がなく、月を愛でる文化が発達した。

・旧暦（昔の暦）は月の満ち欠けをもとに生まれた。新月を一日（ついたちの語源はつきだち）とし、満月を十五日として、次の新月までをひと月とした。実際には二十九・五日であり、〇・五日足りない分は小の月（二十九日）と大の月（三十日）を交互にすることで調整した。

・十五夜（中秋の名月）は、夏野菜などの収穫を感謝するためのものであり、元々は中国の「中秋節」が起源。中国では里芋や月餅を飾るが、日本ではその年収穫した米（新米）でだんごを作って飾る。

平安時代には「観月の宴」という行事があり、団子や栗、御神酒などを供えていた。

・月の呼び名も色々あり、十五夜を「芋名月」と呼んだり、雲で月が見えないと「無月」、雨が降っていると「雨月」と呼んだりした。

・十五夜以降も、十六夜（いざよい）、十七夜（立待月）、十八夜（居待月）、十九夜（寝待月）、二十夜（更待月）などがある。二十三夜、二十六夜などは、月の出が午前二時三時のため、飲食をして寝ずに月の出を待つ風習から来ている。月には、体の中にある悪い虫などを退散させる力があると信じられていた。日本各地に「二十三夜塔」や「二十六夜山」などがある。会津地方では、特に西側の地域に多く残されている。

・月を愛でる文化の一つが文学。「竹取物語」のかぐや姫は月から来て月へと帰っていく、世界初の SF 作品といつてよい。清少納言の「枕草子」には、「夏は夜。月の頃は更なり。」とある。

・生活の中では、お菓子に「月」の名が使われている。お酒（ビール、ワイン、日本酒など）にも「月」の名が使われているものが多い。・同じ満月でも、夏は低い位置にあり、赤っぽい色をしている。「ストロベリームーン」とも呼ばれる。冬は高い位置にあり、「コールドムーン（寒月）」などと呼ばれる。

・星を愛でる文化は、中国から学んだ。国宝に指定されているキトラ古墳壁画には、星座が描かれている。見える星と見えない星があり、その絵がいつ、どこで描かれ

たものか推定することができる。

・七夕は中国が起源。旧暦七月七日夜に織姫と彦星がデートをする。日本では「星合」と呼ばれ、独自の文化として定着した。江戸時代には、笹竹に素麺や瓜、果物を供えてお祈りをした。海辺の町では、笹飾りを海に流す風習もある。

・現代では、新暦七月七日に学校行事で七夕を祝う学校がある。仙台七夕のように、月遅れの八月に行われるものもある。旧暦七月七日に伝統的七夕として行っている地方（石垣島など）もある。

・星の和名には、すばる（プレアデス星団）、つづみ星（オリオン座）、ひしやく星（北斗七星）などがある。「三つ星に一文字」など、家紋になっているものもある。

・神話に書かれた星、物語に書かれた星も多い。（銀河鉄道の夜など）・現代は、光害により星が見えづらくなっている。会津には満天の星を眺められる所が多い。若松市内には、日新館天文台跡が残され、秋篠宮紀子様も訪問されている。

・美しい星を眺める星空浴をお薦めする。季節ごとの星々を各々がその場所で見上げるだけでできる、時空を超えて癒やされるとともに、闇と星から想像力を得たり、宇宙的視点を得たりすることもできる。親子で楽しんでほしい。